

# ことしもまた、新たな縁(えにし)を結ぶ会 '10!

13:00

開会 総合司会 杉本浩司さん、小川陽子さん

## 13:05-14:30 第1部「この10年～様々な挑戦～」

「人を動かすのは感動」を実践する「やねだん」のリーダー・・・・・・・・ 豊重 哲郎さん  
世界初の盲聾の大学教授（東京大学先端科学技術研究センター）・・・・ 福島 智さん  
「うそをつかない医療」「患者と医療者の架け橋」を実践中の・・・・ 豊田 郁子さん  
「たまゆら」の被災者にも個室と居場所で支援している

山谷・ふるさとの会の創始者・・ 水田 恵さん

コーディネーター 元NHK記者で、江戸川大学教授の・・・・ 隈本 邦彦さん

14:30-15:00

♪ 「えにし結び名簿」を手に、席を離れての「えにし結びたい・む」 ♪

## 15:00-16:30 第2部「介護保険30年～原点に戻って考える」

介護保険の“猛母”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 樋口 恵子さん

“ミスター介護保険”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 山崎 史郎さん

高齢者介護・自立支援システム研究会（通称、大森研究会）の・・・・ 大森 彌さん

自・社・さ政権・福祉プロジェクトの自民党のキーマンだった・・・・ 衛藤 晟一さん

自・社・さ政権・福祉プロジェクトの社会党のキーマンだった・・・・ 五島 正規さん

“介護保険の産婆”を名乗る いまは阪大教授の・・・・ 堤 修三さん

☆☆きょう、岩波書店から発刊されたホヤホヤの本『物語・介護保険』に登場なさる方々です☆☆

コーディネーター

福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにし」ネット 志の縁結び係&小間使い・大熊由紀子さん

16:30 第1部・第2部閉会・第3部に参加の皆さまは、お急ぎください。

「日比谷 松本楼」に会場を移して

## 17:00-20:00 第3部「老いても障害があっても死が間近でも、安心と誇りをもち、選んだ場所で暮らせる仕組みをつくるための戦略会議」

コーディネーターは、毎日新聞の野沢和弘さんと朝日新聞の岡本峰子さん

幻覚&妄想大会・当事者研究で人々の目から鱗を剥がしたべてるの家の・ 向谷地 生良さん

高齢・障害・児童の「制度の壁」を壊した「このゆびとーまれ」の・・・・ 惣万佳代子さん

高齢者施設を解体中の・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小山 剛さん

認知症で、独居の癌患者を、自宅で看取る実践を続けている・・・・ 小笠原文雄さん

市ヶ谷のマザーテレサ・訪問ナースのパイオニア・・・・・・・・ 秋山 正子さん

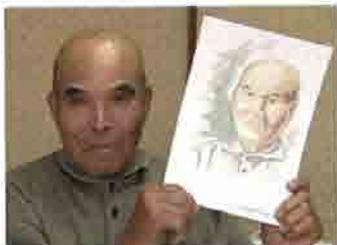
DPI（障害者インターナショナル日本会議）事務局長の・・・・ 尾上 浩二さん

在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク代表・・・・ 黒岩 卓夫さん

厚生労働省老健局長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮島 俊彦さん

☆☆フロアから、池田徹さん、市原美穂さん、権丈善一さん、高橋紘士さん、浅川澄一さん  
滝脇憲さん、藤原瑠美さんなど、現場・論客のみなさまが飛び入りし、徹底討論して提案☆☆

著書の注文は、〒893-1605 鹿児島県鹿屋市串良町上小原 4964-2  
tel 0994-63-1731 fax0994-63-1732  
DVDの注文は Eメールで tokusen@mbc.co.jp へ。



⑤迎賓館の芸術家が肖像画  
(こちらは、おとなしく)



③ついに、みんなに  
1万円ずつのボ  
ナス袋も手作り



⑥目を大きく描いて  
という注文に応  
じて、襖に。



④空き家を回収  
して、「迎賓  
館」と命名



②ぐんぐん増える自主財源



豊重さんは、自主財源づくりにさらに知恵をほりました。畜産農家が多い「や

◆「迎賓館」に「アーチスト」が

味わってもらったためでした。

98年、2メートルもの雑草が生い茂る町有地20アールを借りて、「わくわく運動遊園」づくりに取り組みました。土地の造成、木材の切り出し、休憩所や遊具などの建築まで、すべて、集落の人々が資材と労力を出し合いました。大工だった人、建設現場で働いた人など、それまでひっそりと暮らしていたお年寄りが大活躍しました。顔も知らなかった人ですが、一年半の遊園づくりで気持ちを通じるようになりました。

めのカライモづくりに挑戦しました。カライモは暴風雨などの災害に強いだけでなく、農家が植えたあとにの苗をタダで提供してもらえるので元手いらずです。土地は、有線放送で呼びかけると3人から30アールの無償提供の申し出がありました。植え付けから収穫まで、主力は高校生、指導役はお年寄たちです。「全員参加の手作り」「お年寄りは地域の生き字引」「どんどん出番を」が、以来、村の合い言葉になりました。

300人ボーナスがでる集落」をどうぞ。

くわしくは、豊重さんの著書「地域再生」行政に頼らない「むら」おこし」、山縣さんたちのDVD「やねだんく人口

写真④は、空き家を修理した、その名も「迎賓館」です。「アーチスト、どうぞ」と呼びかけたところ、画家、写真家、陶芸家が全国から集まってきました。村の人々に絵や陶芸を教えるだけでなく、箱入りの名物セットの中身を考えたり、包装デザインに力を発揮したり……。

02年、土着菌を生産・販売するセンターも完成。これが評判になって年間200万円ほどの利益を生むまでに。余剰金はグラフのようにぐんぐん増えてゆきました。収益を元に自治会費を7千円から4千円に値下げ、独り暮らしのお年寄の家に無料で緊急警報装置や煙感知器を設置。無線を全戸に整備。06年春には、写真③のように全世帯に1万円ずつのボーナスが。写真④は、空き家を修理した、その名も「迎賓館」です。「アーチスト、どうぞ」と呼びかけたところ、画家、写真家、陶芸家が全国から集まってきました。村の人々に絵や陶芸を教えるだけでなく、箱入りの名物セットの中身を考えたり、包装デザインに力を発揮したり……。

ねだん」では糞尿の臭いが悩みでした。これを、山林に普通にいる土着菌を使い、処理できないだろうか。かつて、ウナギの養殖をしていたとき、ヘドロ化した排せつ物を微生物で処理した経験がヒントになりました。米ぬかに菌を混ぜ、みんなで交代でかき混ぜながら発酵を進め、土着菌を試作。家畜の餌に混ぜると悪臭が消え、ハエも減り、家畜も健康になり、生ゴミの処理にも使えるようになりました。

# ゆき@やねだん、感動から奇跡が生まれました(\*^ ^\*)

大熊 由紀子

ある日東京生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『寝たきり老人のいる国(いない国)』『福祉が変わる医療が変わる』(ぶどう社)『患者の声を医療に生かす』(医学書院)など。国際医療福祉大学大学院教授(医療福祉ジャーナリズム)、千葉県健康福祉政策担当参与。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係。http://www.yuki-enishi.com/の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバー読めます。

第76回

①柳谷集落を国際的存在にした豊重哲郎さんと山縣由美子さん



## ◆ホンモノのボランティア魂

「やねだん」、鹿児島県の大隅半島にある鹿屋市の柳谷集落の愛称です。人口300人、高齢化率4割近いこの村が、海外からも注目されています。この集落をとりあげた南日本放送のテレビ番組がDVDになり、英語版までできて、世界138カ国に渡ろうとしているのです。名産が次々と生まれ、どの家にも1万円ボーナスが配られる。文化と笑顔があふれ、若者たちが惹きつけられ、人口まで増えてしまった。そんな奇跡が、この村に起きたからです。

96年、村の人たちが55歳の豊重哲郎さんを自治公民館の館長に選んだのが、ここのはじまりでした。「やねだん」をつくりあげた登場人物すべてに流れているのは、本誌の読者のみなさまと同じ、ホンモノのボランティア魂です。

## ◆「補助金や行政には感動がない」

誰からも注目されていなかったときから5年間、「やねだん」に通い続けた南日本放送のニュースキャスター、山縣由美子さんがこの集落に惹かれたのは、偶然聴いた講演会での豊重さんの言葉でした。

「地域を再生させるためには、補助金や行政に頼っていたのではダメです。なぜなら、そこには、感動がないからです」

「感動」という言葉が、由美子さんの心に強く響きました。

「豊重さんはこうもおっしゃいました。「人がまとまる時、力をあわせる時、それは、理屈や命令によって生まれるんじゃない。感動して、仲間意識を持った時に、みんな喜んで動き出すのです」。今からでは遅すぎるかもしれませんが、地域が再生していく姿を、ぜひ、カメラで追わせてくださいとお願いにゆきました」。

## ◆「まとまるまでは黒子で」

豊重さんの返事は意外なものでした。「遅すぎることはまったくありません。実際に、タイミングがよかったです。もっと早くこられたら、私は断っていたでしょう」

本誌の読者のみなさまが経験なさっているように、組織が生まれ育っていく過程はまるで、ガラス細工みたくです。まとまりきらないうちにテレビが入ってきたりすると、ヒビが入って壊れてしまいます。

「本当にまとまってくるまでは、リーダーの私は黒子でいるべきだと思っていました。テレビが入ると、私にカメラが向けられてしまう。だから、申し込みがあっても断っていたでしょう。でも、もう大丈夫だと思っただから、どうぞ」

## ◆生き字引のお年寄りに、出番！

「97年、手始めに、自主財源づくりのため」



うことになるだろう。「障害の有無」を含め、個人間のさまざまな能力の差や外見の相違などには、もともと何ら本質的な意味がないように思えてくる。

④私のネット上でのハンドル・ネームは、E Tだ。これは「エクストラ・テレストリアル (Extra-Terrestrial)」、つまり地球外生命体、要するに宇宙人の意味の略称だ。私は自分が盲ろう者になって、いったん失った目と耳でのコミュニケーションを、今度は指先のコミュニケーションとして取り戻すことができ、これは「見えなくて聞こえない」という宇宙空間のような状態から他者と交流できる「地球」に戻ってきたまるでE. T. のような存在だと自分のことを半分冗談、半分本気で思っている、ということである。

人はみな異なる状況で生きていて、それぞれの条件の下でそれぞれの人生を生活している。

一見ばらばらでかけ離れた状況を生活しているような私たちだけけど、案外共通する問題やテーマを抱え、類似した思いや感覚を抱いている面があるのではないか。たとえば、私の場合はこういうことを感じたり考えたりしているのだけれど……。とまあ、こんなところがメッセージだろうか。

こうした共通のテーマの一つではないかと感じるのは、人生がさまざまな人との「つながり」の中で織りなされているということだ。私の場合、常に予想外のできごとがあり、幾たびも不思議な出会いがあった。一見まったく無秩序で無関係な経験の連続に思えるのだけれど、それらの経験が全体として絡み合っ私に人生に結実しているという思いを抱く。

たとえば、出生から十八歳で盲ろう者になって、母が指点字を考案するまでの過程だけでも、家族・親戚、近所の人、病院の医師や看護師、学校の先生や友人、などなど実にさまざまな人とのつながりや、そうした人たちによる支えがあった。

人間は一人ひとり異なる性質や条件をまとって生活している。しかも本質的にばらばらであり、孤独な存在だ。それでも人はみな、どうかして互いに離れ離れにならないように、いつも必死で誰かの手を探し求めながら、暗黒の宇宙を旅している。こうした私達人間一人ひとりを最後の部分でつなぎとめる「命綱」が、心に響くコミュニケーションなのではないかと感じている。



つまり、「生きることは人とつながることであり、つながりを持つとする営み自体に生きる手応えがある」というのが、私が体験をもとにたどりついた実感である。

(福島智さんの著書『生きるって人とつながることだ！』(素朴社)から抜粋しました)



⑥全米に広がり効果をあげている医療事故死を十万人減らそうキャンペーン



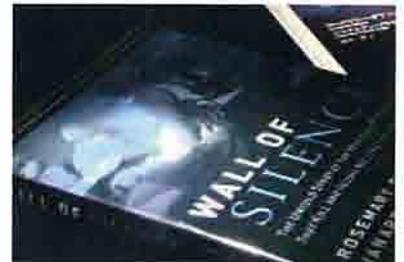
④ソレル・キングさんと亡きジョージちゃん



②豊田郁子さんの長男、理貴ちゃん



⑤涙を流しながら、海を隔てた同じ体験を語り合う2人の母



③2人の母を結びつけたローズマリー・ギブスンさんの著書『沈黙の壁』

関西テレビの映像から(②~⑥)

そして、「医療福祉ジャーナリストの早野真佐子さん、医療被害者の声を綴った『沈黙の壁』(写真③)の著者、ローズマリー・ギブソンさんの仲立ちで、アメリカの医療被害者を訪ねることができました。

#### ◆ソレルさんとリンダさんの物語

ソレル・キングさんは、7年前、1歳半のジョージちゃん(写真④)が、名門のこども病院で、麻酔薬の誤使用でなくなった経験をもっていました。

ただ、郁子さんのときと違い、病院は全面的に非を認め、賠償金を支払いました。彼女は賠償金で、ジョージ基金をつくり被害体験を語り始めました。

アメリカではいま、「被害者の体験の物語こそ、データ以上に大切」といわれるようになりつつあります。その物語が人の心を動かし、病院の文化を変えていくからです。2人は、涙の中で気持ちを伝えあいました。

#### (写真⑤)

リンダ・ケリーさん。彼女は、足の手術をうけたときの麻酔の事故で心停止に陥りました。その後の処置が功を奏して後遺症もなかったのですが、心に深い傷を負いました。

ところが、事故にかかわった麻酔科医が悩みに悩んだ末、病院の上司や弁護士らの助言に逆らって、彼女に託げる手紙を寄せ

たのがきっかけで、彼女の気持ちは変化しました。同じような境遇にある人びとの心のサポートをする組織を立ち上げました。「医療が原因でトラウマを負った人びとにサポートと癒しを与えるネットワーク」の頭文字をとったMISSです。

#### ◆稲葉一人さんの物語

法律を教える大学教授です。裁判官の経験を持ちながら、94~95年にかけて米国に留学し、医療者と患者の間にたつメディアエーターに期待をかけてきました。その稲葉さんが、郁子さんと淳子さんをはじめ現場と接することで、従来のメディアエーターに次第に疑問をもつようになりました。

医療機関にトレーニングを受けた医療メディアエーターを置けば、医療紛争が解決するという考えは、幻想ではないのか。事故を起こした当事者が、患者・家族に知りうる限りの事柄を真摯に告げ、説明する態度が大事なのではないか。

#### ◆病院の文化を変える

9人は、「架け橋―患者と医療者を結ぶ研究会」という名で、病院に新しい文化を根付かせる運動を始めようとしています。

ミスがあっても、隠さず、逃げずに、誠実に患者や家族に向き合う、そういう文化です。代表は郁子さんと淳子さんです。



① 架け橋設立のための合宿勉強会で右手前が法律家の稲葉一人さん、その左が医療事故で夫を失った北田淳子さん

# ゆき@患者と医療者の架け橋をもとめて

(\*^ ^\*)

大熊 由紀子

ある日東京に生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『運たきり老人のいる国』、『福祉が変わる医療が変わる』（ぶどう社）『患者の声を医療に生かす』（医学書院）など。国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム）、千葉県健康福祉政策担当参与。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係。http://www.yuki-enishi.com/の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバー読めます。

第68回

同じ志で次々と結ばれていった9人が、9月の連休、大阪、名古屋、東京から小田原に集まりました（写真①）。医療事故の遺族が2人、医師3人、法律家1人、ナース3人。

ナースのひとり、蒸留水とそっくりな容器に入っていたエーテルを人工呼吸器にセットして17歳の少女を死なせてしまった辛い体験の持ち主です。

8人に共通しているのは、次のような思いでした。

① 医療事故の当事者になった患者や家族、医療者は心の底まで深く傷ついている。

② 当事者どうしの信頼は、誠実に対話を重ねていくことで、小さな信頼が次第に大きな信頼に結びつく。

③ 患者と医療者はパートナーである。

そのような思いは、8人の実体験に根ざしたものでした。

## ◆北田淳子さんの物語

淳子さんの夫、義典さんは筋萎縮性側索硬化症（ALS）が進行して、人工呼吸器なしには、生きられない身でした。その管が外れ、49歳でこの世をさらなければなりません。4年前のことです。

その事故が起きた阪南中央病院の患者情報室「とまり木」で、淳子さんは、いま、相談員として活躍しています。

事故が起きた直後、主治医が「僕が管

をつなぎかえたとき、うまく入っていなかったのかもしれない。もうしわけない」と深々と頭を下げたこと、その主治医が、いつも義典さんの身になって親身に考えてくれた人であったこと、病院側がどんな小さなことも隠さず家族に報告したこと、和解後も事務長が何度も淳子さんの家を訪れたこと、その事務長から「患者情報室で働いてみませんか」と誘われたことが、病院で働く決心につながりました。

## ◆豊田郁子さんの物語

郁子さんの体験は対照的でした。息子の理貴ちゃん（写真②）が、理不尽な死を迎えたとき、病院は何の説明もしませんでした。死の原因が、診断ミスと引き継ぎの悪さによるものと知ったのは、見るに堪えかねた院内スタッフが新聞社に寄せたカルテからでした。

失意のあまり、理貴ちゃんと同じ年頃の子どもを見るとパニックになるなどノイローゼ状態だった郁子さんが蘇ったのは、新葛飾病院の清水陽二院長の「うちの病院でセーフティ・マネジャーとして働いてみませんか」という誘いでした。

そこで働くうちに、事故を起こした医療者自身も、立ち直れないほど傷ついていること、患者や家族に病院が包み隠さず、誠実に向き合うこと、ミスの教訓を生かすことが、癒しにつながることを知りました。

## 居住セーフティネットと 支援付きの地域社会

誰もが住みなれた地域で暮らせるために

NPO法人 ふるさとの会  
水田 恵

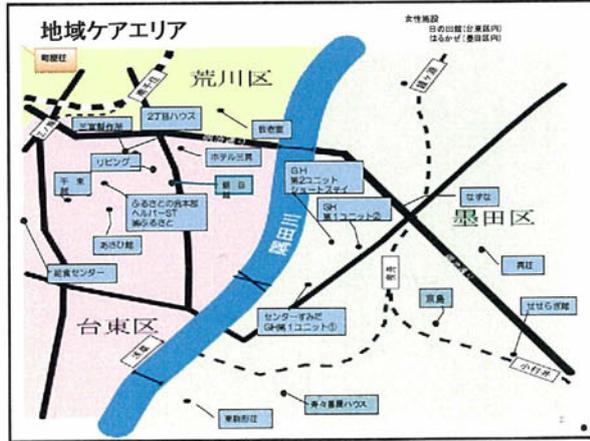
## 地域協働型 居住セーフティネット

### 入所者リストから見える これが いまの ニーズ

| 自立援助ホーム入居者 |            |       |      |      |       |       |
|------------|------------|-------|------|------|-------|-------|
| 年齢         | 疾病         | ADL   | 介護   | 障害   | 居所    | 備考    |
| 60後        | 人工透析       |       |      | 身障1  | 旅館    |       |
| 60前        | 統合失調症      |       | 申請中  |      | 旅館    |       |
| 40代        |            |       |      | 愛の手帳 | 旅館    |       |
| 60後        | がん         | 流動食   |      |      | 旅館    |       |
| 70代        | 未受診        | 杖歩行   |      |      | カプセルH |       |
| 40代        | AIDS       |       |      |      | サウナ   |       |
| 40代        | 肝炎、アルコール依存 |       |      |      | 宿泊所   |       |
| 50代        | 脳梗塞        | 介助歩行  |      |      | 宿泊所   |       |
| 70歳        | てんかん、心臓病   | 聴覚障害  | 要支援2 | 身障4  | 宿泊所   |       |
| 50代        |            | 視覚障害  |      |      | 宿泊所   |       |
| 50代        | パーキンソン、認知  |       | 介護3  | 身障2  | 有料H   | 茨城県   |
| 70歳        | 肝炎、腎臓管狭窄   | 車椅子   | 介護4  |      | 病院    | 近隣病院  |
| 50代        | AIDS、認知症   | 左手マヒ  | 介護3  | 身障1  | 病院    | 都立病院  |
| 60後        | DM、パーキンソン  | 歩行困難  | 申請中  |      | 病院    | 他区病院  |
| 70代        | DM、認知症     | 歩行不可  | 介護3  |      | 療養病床  | 都下、医療 |
| 60前        | 統合失調症、アルコ  |       |      | 精    | 申請中   | 精神科病院 |
| 70代        | アルコール依存症   | つたい歩き | 介護1  |      | 精神科療養 | 都下    |

## ふるさとの会のミッション

- 生活困窮者が地域のなかで、安定した住居を確保し、安心した生活を実現し、社会のなかで再び人としての役割や尊厳・居場所を回復するための支援を事業として行うこと

## 支援対象者

- 働くことのできない人  
高齢・疾病・障害を持つ  
単身の生活困窮者
- 働くことのできる人  
働くことのできる生活困窮者、自立支援センター・更生施設等の入所者、「派遣村」、様々な就労阻害要因を抱えた要保護者



### ふるさとの会利用者像 合計 986名(10.3現在)

#### 中間施設

**働くことのできる人**

- 自立援助ホーム(就労支援ホーム) 31名
- 2丁目ハウス 11名
- はるかぜ 9世帯
- なすな 4名
- 緊急就労居住支援事業 荒島ハウス 10名

**働くことのできない人**

- 宿泊所 103名
- 千夏 21名
- 日の出 19名
- あさひ 25名
- せせらぎ 38名
- 自立援助ホーム 147名
- 東駒形 12名
- ホテル三晃 80名
- 長花 18名
- あやぎ屋 120名
- 舞鶴前日暮 12名

#### 地域支援

地域居宅: 692名

- 生保世帯 376名
- 就労世帯 316名

うち、アパート保証: 365名

グループホーム: 13名

### ふるさとの会 居住支援

- 自立援助ホーム 東駒形荘(墨田区)
- 自立援助ホーム ホテル三晃(台東区)
- 第二種社会福祉事業宿泊所 あさひ荘(台東区)
- 第二種社会福祉事業宿泊所 千夏荘(台東区)
- 第二種社会福祉事業宿泊所 日の出荘(台東区) 女性専用
- 自立援助ホーム 突在(墨田区)
- 自立援助ホーム 舞々暮屋ハウス(墨田区)
- 精神障害者グループホーム ふるさとホーム(墨田区) 2ユニット

### 入所者像(宿泊所、自立援助ホーム) 合計257名 2010.3

**介護**

|           |             |              |
|-----------|-------------|--------------|
| ※要介護認定    | 計143(55.6%) | 【年齢構成】257名統計 |
| 要介護1: 5名  | 要介護2: 5名    | 30代以下: 9名    |
| 要介護3: 47名 | 要介護4: 41名   | 40代: 10名     |
| 要介護5: 27名 | 要介護6: 9名    | 50代: 37名     |
| 申請中: 8名   |             | 60代: 93名     |
|           |             | 70代以上: 108名  |

**認知症患者(要介護認定問わず) 92名(35.8%)**

**三障害 手帳取得者 計85名(33.1%)**

※日常生活(域の手帳)

|        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|
| 1種: 0名 | 2種: 0名 | 3種: 0名 | 4種: 7名 |
| 11.7%  |        |        |        |

※精神障害者保健福祉手帳

|        |         |        |
|--------|---------|--------|
| 1種: 2名 | 2種: 19名 | 3種: 3名 |
| 21.2%  |         |        |

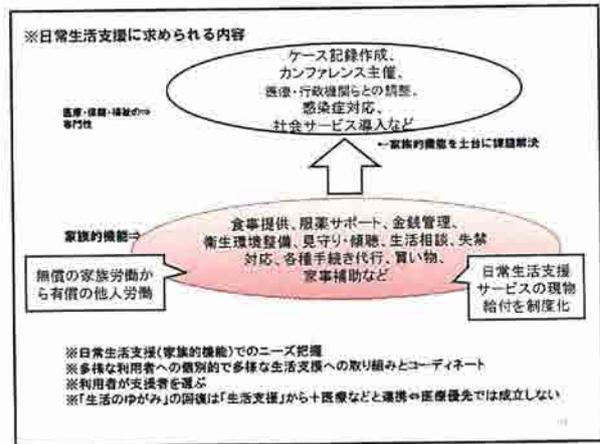
※身体障害者手帳

|         |         |        |         |
|---------|---------|--------|---------|
| 1種: 12名 | 2種: 20名 | 3種: 7名 | 4種: 14名 |
| 5種: 2名  | 6種: 2名  | 7種: 0名 |         |
| 41.7%   |         |        |         |

**要介護・三障害  
いずれかに該当する**

**213/257**

(82.9%)



### 地域ケア連携をすすめる会 第1回総会記念シンポジウム 「単身低所得高齢者・障害者の地域生活支援と居宅サービス・医療サービスの連携」

日時: 2010年2月13日(土)14時~17時半

会場: 台東区立台東病院会議室

参加者: 医療・介護従事者、福祉事業者、ホームレス支援団体、研究者、行政関係者、報道機関、弁理士等、47団体より計126名が参加

記念講演「認知症ケアから見た単身困難高齢者の地域生活支援」  
栗田主一氏 東京都健康長寿医療センター 自立促進と介護予防研究チーム 研究部長

### NPO法人ふるさとの会による山谷・墨田地域で 切れ目の無い地域密着サービスを提供する包括的な支援システムを構築

|               |                   |                      |            |
|---------------|-------------------|----------------------|------------|
| 日常生活圏域に       |                   |                      |            |
| 中間通過施設        | 第二種社会福祉事業宿泊所      | 4棟104名               | 要介護・三障害    |
|               | 自立援助ホーム           | 4棟135名               | 要介護・三障害    |
|               | ※認知症特化型           | 1棟12名                | 要介護・認知症    |
|               | 就労支援ホーム           | 3棟21名                | 母子・三障害     |
|               | 緊急就労居住支援事業        | 1棟10名                | 派遣切り稼働層    |
| 在宅            | 地域生活支援センター        | 2ヶ所692名              | 困難単身       |
| 中間施設(特定)      | グループホーム(ショートステイ等) | 2ユニット13名             | 困難・三障害     |
| 社会サービス(基礎)    | 給食センター            | 1ヶ所 750食/日           |            |
|               | ヘルパーステーション        | 1ヶ所 中間施設・在宅・借宿       |            |
|               | 株式会社ふるさと          | 1ヶ所 29名雇用            | アパート保証365名 |
|               | 就労支援推進協議会         | 156名増体裁講習受講          |            |
|               | ワークステーション         | 58名雇用有料職業紹介及び人材派遣業登録 |            |
|               | 生活再建相談センター        | 64名 利用所出所者(高齢・障害)    |            |
| CUCS(地域ケアネット) | 地域ケア連携をすすめる会      | 47団体個人               |            |
|               |                   | 基幹病院、診療所(内科、精神科、歯科)  |            |
|               |                   | 訪問看護、介護、デイケア、デイサービス  |            |
|               |                   | 保健所・福祉事務所・消防署・食品会社など |            |

## 樋口恵子さん登場

### 3つの「もし」

- もし、朝日新聞に「人を見る目」があったら
- 女子東大生、柴田恵子さんのお見合いが、もし、不調に終わっていたら
- もし、1978年の厚生白書が「同居は、我が国の福祉における含み資産」と書かなかつたら

この3つの「もし」が重ならなかつたら、介護保険は、今より、ずっと後退した姿になっていたかもしれません。「介護保険そのものが誕生していなかった可能性もある」という人さえいるのです。

敬老の日を前にした1982年9月10日、東京・新宿区民センターに600人を超える女性が全国から駆けつけました。会場のいすが足りず、ゴザを敷いて座るといった熱気です。

主婦、学者、弁護士、市民運動家、ジャーナリスト、国会議員……、30代から70代、有名、無名、実に多彩。熱心な自民党支持者から革新政党幹部まで、超党派というのも画期的でした。

女性たちを結びつけたのは、厚生白書の「同居は福祉の含み資産」という提言への戸惑いと怒りでした。呼びかけ人63人のカナメ、樋口恵子さんは、当時、中央社会福祉審議会の委員で老人問題の部会に属していました。そこで、折に触れて力説しました。

「家族の看病のための退職は、女性が9割です。早い退職は女性の無年金、低年金、資産形成力の不足を招きます」

「独り暮らし老人の4分の3は女性。家族介護のはてに、長い老いを貧しく生きる女性。高齢化問題は女性問題でもあるのです」

けれど、樋口さん以外の委員はすべて男性。

「また、始まった」といううんざりした顔がかえってくるだけで、訴えても、訴えても、中心テーマになることはありませんでした。

全国に広がりつつあった「模範嫁表彰」「孝行嫁さん顕彰条例」も危機意識に拍車をかけました。

1枚の紙切れでことをすませようとするなんて！

第一回女性による老人問題シンポジウム「女の自立と老い」（写真）に集まった女性たちは、こうした思いを共有していたのです。



83年3月には、「高齢化社会をよくする女性の会」が誕生しました。「永続的な組織を」という声にこたえたもので、個人会員500人、グループ会員13で発足したのですが、8年後には北海道から沖縄まで個人会員827人、グループ会員72にふくれあがりました。500人を超える大グループも生まれました。

「見える政治」「開かれた行政」をつくりあげていく活動のさきがけでした。2004年9月11日には、1800人が入場できる新宿文化センターで第23回全国大会が開かれました。



## 山崎史郎さん、大森彌さん、堤修三さん ＋フロアの伊藤雅治さん、和田勝さん、 渡邊芳樹さん登場

喋る介護保険、歩く介護保険、介護保険の鉄人、介護保険の伝道師、ミスター介護保険、介護保険の幻の父、逐電した父、跡を継いだ父、家出した長兄、養子に行った次兄、介護保険の猛母、慈母、モナリザ……。

介護保険の成立にかかわった人々に与えられた"称号"の一部です。

命名者は、厚生労働省元老健局長の堤修三さん。堤さん自身は老健局を去るとき、「介護保険の哲人」という称号を贈られています。

### 「薬漬け」を退治しようとしたら「粗診粗療」に

「ミスター介護保険」と後に呼ばれることになる山崎史郎さんに初めて会ったのは、1993年のことでした。講演のため北海道を訪ねた私の目の前に、分厚い説明資料を抱えた山崎さんが突然、現れたのです。北海道庁の成人保健課長。厚生省から出向中でした。

山崎さんには、老人保健課課長補佐のときの苦い思いがありました。

当時は老人病院全盛の時代でした。

「ヨメ」と呼ばれる人々の無給労働を前提とした「日本型福祉政策」が1979年に打ち出されて福祉予算が切りつめられ、家族は疲れ果てていました。それを目当てに、終生お預かり型の“病院もどき”が、地価の安い郊外に、によきによきと建てられていったのです。

日本の医療保険報酬は、薬を使えば使うほど収入があがる出来高払い制度をとっていました。そこで、志の低い経営者は「薬漬け」という手法を編み出しました。口からちゃんと食べられるお年寄りにまで点滴をする、といった方式です。

医療費は上昇し、日本独特の「寝たきり老人」が大量製造されました。

なんとかしなければ、と当時の老人保健課長、伊藤雅治さんたちは考えました。そして、薬の量を増やしても収入が増えない「包括払い」を取り入れました。不必要な点滴が減って、お年寄りの顔色はメキメキよくなってゆきました。

経営第一の病院は、この制度でも、収入を増す手法を考えだしました。必要な治療やリハビリを手抜きする「粗診粗療」の横行です。

山崎さんは米国生まれのMDS/RAPSというケア評価の道具を使ってこの状況を打開できないかと考えました。仲間と手分けして土日返上で翻訳し、北海道の老人病院に入院中のお年寄り1000人にこれを試してみました。私が北海道を訪ねた時は、その成果が出始めたころだったのです。

### 「難しいことを、楽しそうに」

このような仕事ぶりを注目していた人がいました。事務次官の古川貞二郎さんです。

古川さんは次官を退官後、官僚機構の頂点、内閣官房副長官に就任。8年7か月という史上最長の在任期間中に、村山、橋本、小淵、森、小泉、5代の首相を支えることになった大物次官です。枕元

にもメモをおいて、5、6年後の政策を担う人事のプランを練るといふ深謀遠慮の人。山崎さんを、「難しいことを、楽しそうにやってしまう人物」と評価していました。

そのころ古川さんは、政策の重点を介護の充実に向けなければならぬと考えていました。同時に、財源を租税に頼る

ことの限界を感じていました。税財源は大蔵省がにぎって思うように増やせません。国民福祉税騒動で、税財源を膨らませることが至難のワザであることもはっきりしました。

そのような限られた税財源の制約の下で介護の財源を確保しようとすれば、他の福祉サービスを食ってしまうことにつながります。そうはいっても、医療保険や年金保険のような社会保険方式への政策転換には、大蔵省はもちろん、省内からも反発が予想されました。

古川さんには多くの「語録」があるのですが、その中に「やるか、やらないか迷うときは『やる方』をとり、どちらか迷うときは、『やりたくないなあ』と思う方を選ぶ」というのがあります。この問題でも困難な道が選ばれました。

古川本部長のもと、初代事務局長は、第17話に登場した阿部正俊審議官（後に、参議院議員）。阿部さんが老人保健福祉局長になってからは、“根回しの名人”、和田勝審議官が事務局長に任命されました。そして専従スタッフのトップ、事務局次長として、山崎史郎さんが北海道から呼び戻されたのでした。

「苦勞をかけることになると思う。いろんな人が君を蹴飛ばしにくるかもしれない。渡邊芳樹くんを兼務で助っ人につけよう」と古川次官から言われました、と山崎さんは回想します。

その渡邊さんは、スウェーデン大使館勤務の経験があって、この分野に明るく、八方目配りができる人物でした。

こうして、いよいよ、高齢者介護対策本部が誕生することになり、記者クラブに説明している94年4月8日、細川首相が、またまた、突然の記者会見をしていました。

「寝たいってことですよ。休みたいってこと」。

こんどは、辞意表明でした。

### 1994年7月時点の高齢者介護対策本部事務局の陣容と現職

|       |        | 現 職                 |
|-------|--------|---------------------|
| 事務局長  | 和田 勝   | 国際医療福祉大学大学院教授       |
| 事務局次長 | 山崎 史郎  | 厚生労働省老健局総務課長        |
|       | ☆渡邊 芳樹 | 厚生労働省年金局長           |
| 次長補佐  | 増田 雅暢  | 内閣府少子・高齢化対策担当参事官    |
|       | 伊原 和人  | 厚生労働省企画官（障害保健福祉部併任） |
|       | ☆香取 照幸 | 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課長 |
| 主査    | 泉 潤一   | 大阪府健康福祉部高齢介護室介護支援課長 |
|       | 野村 知司  | 厚生労働省精神保健福祉課課長補佐    |
| 事務局員  | 渡辺 幹司  | 岡山市保健福祉局福祉部長        |

☆は併任

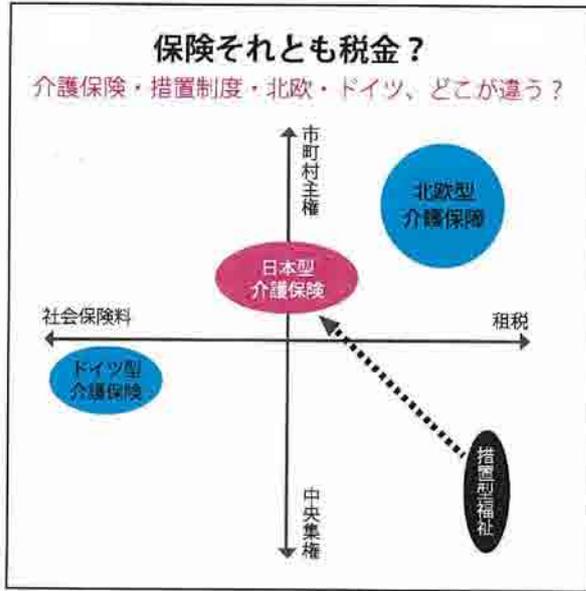
## 市町村は、最初の政府

山崎史郎さんの最初の仕事は、7月に立ち上げる高齢者介護・自立支援システム検討会の座長役を口説くことでした。

白羽の矢をたてたのは、「市町村は最初の政府」と唱えていた、行政学が専門の東大教授、大森彌（わたる）さんです。

図をご覧ください。北欧、ドイツ、日本の介護保障の特徴を2つの軸で私流に分類してみたもので、円の面積は財源の大きさを表しています。

X軸は財源が社会保険か租税かを表しています。



ドイツは全額社会保険料、日本の措置制度と北欧は全額租税。日本の介護保険は、税と社会保険料をあわせた折衷型制度です。

Y軸は、中央集権的運営か市町村主権か、です。

北欧の介護保障は、租税といっても市町村税ですから、市町村が主役です。日本の措置制度は、細かいところまで中央で決める中央集権です。

「税方式」と名前はおなじでも、中央で万事、細かく決めてしまうか、市町村の事情、必要度によって住民の意向を確かめながら集めて使うかで、結果はまったく違うことになります。ドイツは州が主役。

日本の介護保険を設計した若手官僚たちは市町村を主役にする北欧型を目指していました。

「介護保険」という名称から、ドイツの介護保険を

手本にしたと誤解する人が多いのですが、事務局には「ドイツを手本に」と考えている人は、いませんでした。

介護サービスのメニューも、市町村を事業の主役にすることも、デンマークやスウェーデンなど北欧がモデルでした。ただし、費用調達的方式としては、北欧流の市町村税方式は日本の歴史的背景にはなじまず、実現も難しいという判断から、医療保険のように税金と社会保険料をあわせた日本型の財源を本命にすえたのでした。

## 大森彌教授のつらい体験

大森さんは当時を鮮明に覚えています。

「山崎さんが訪ねてきたとき、私は、開口一番、厚生省は本気で措置制度を廃止する決心をしているのですかと尋ねました。すると『かならず廃止します』という。次に、専従を置くのですかと尋ねました。『置きます』という。背水の陣だな、と思いました」

大森さんが措置制度の廃止を強く主張したのには、学問的理由の他に、もうひとつの背景がありました。

“生まれながらの大学教授”といった風貌からは想像できませんが、大森さんは幼くして父を失い、町工場で働きながら夜学で高校を卒業した経験の持ち主です。パートン、道路作業員、くず鉄業、あらゆるアルバイトを経験しました。生活保護を受けていることが、小学校の担任教師の口から、級友に知られてしまい、惨めな思いもしました。

人間の誇りを傷つける「措置」という制度の宿命を、身をもって体験していたのでした。

(物語・介護保険・上巻・第20話「高齢者介護対策本部誕生」より)









した。保険料負担については、日経連の委員が事業主負担の義務付けに納得しません。

被保険者の範囲も意見が分かれたまま。家族介護を評価する介護手当についても激論が関わられました。96年4月の最終報告では、両論併記や多論併記で、なにがなにやら分からないグジャグジャ報告になってしまいました。

このピンチを救ったのが、なんと、与党福祉プロジェクトチームでした。

村山連立政権で、連立与党の間の政策調整役に位置付けられた5つの組織の1つです。

9月、高齢者介護問題について議論を始め、95年6月には「高齢者介護問題に関する中間まとめ」、12月には「第2次中間まとめ」。老健審内の意見が対立が激しくなった96年1月ごろからは、強いリーダーシップを発揮するようになりました。

96年の「介護保険制度の試案作成に当たっての基本的視点」もその1つで、その後の議論をリードしていくことになりました。

プロジェクトチームは、自民3人、社会2人、さきがけ1人を基準に構成され、座長は2カ月づつの持ち回りでした。衛藤晟一（自民党）、五島正規（社会党）、荒井聡（新党さきがけ）の3座長です。

そこに生まれた、党派も信条を超えた不思議な友情、戦略については、のちの「物語」で。

（物語・介護保険下巻・下巻 第37話「2つの「まさか」が……」より）

## 堤修三さん

### +フロアの松本均さん、神田裕二さん、唐澤剛さん、高井康行さん、朝川知昭さん、石黒秀喜さん登場

介護保険制度の草創期にかかわった人たちが、宝物のように大切にしている冊子があります。

「歴史の変革期に稀に現れる幸福な瞬間」というエレガントなタイトルの命名者は、堤修三さん。介護保険制度と切っても切れない長いつきあいの持ち主です。98年1月、大臣官房審議官・兼・介護保険制度実施推進本部事務局長に着任、老健局長などをへて、2004年に厚生労働省を去りました。そのとき、堤さんを敬愛する人々がつくったのがこの冊子です。

冒頭に、堤さんは、こう書いています。

「多くの場合、現実には、既成秩序の柵で身動きがとれず、矛盾に満ちており、利害が錯綜し、皆がバラバラで互いに信頼しあえず、こうすればよいと分かっているにもかかわらず簡単には実現できないものですが、歴史の変革期には、その裂け目のような一瞬に、皆の心が一致し、皆が互いに信頼しあい、新しい理想に向かって、協力して進んでいくという奇跡のようなときが現れることがあるものです」

「介護保険の創設実施とは、わたしには、日本の社会保険の歴史において、否、戦後における国と市町村・都道府県との関係において、地方と国の職員を中心とする関係者が互いに信頼しあい、共通の目標に向かって協働することのできた初めてのプロジェクトであり、関係したすべての人々にとって至福の瞬間だったように思えるのです」

### 長時間労働と激務に耐えた「弁当持ち」

この「至福」を味わった「弁当持ち」とよばれる一群の人々がいました。

弁当持ち仲間から「隊長」と呼ばれている横浜市の介護保険課長、松本均さんによると、定義はこうです。「自治体から厚生省の介護保険制度実施準備室に出稼ぎにしている職員のこと。体験したことのない長時間労働と激務に耐えている。給料は出身自治体から支払われているため、このように呼ばれている。別名、『研修生』ともいわれているが、実際の業務は研修などといった爽やかなものではない」「福祉に通じているか、または、システムに明るい係長クラスを3人ほしいと、たしか香取照幸さんから声がかかって、私が3人の1人になりました。97年4月1日の着任初日から徹夜でした」

図は、97年当時の準備室の見取り図です。

①は、法令系と呼ばれる人たちで、キャップは「歩く介護保険」神田裕二さんです。歩きまわるわけではなく、「ウォーキング・ディクショナリー」の名にふさわしい知識と緻密さから、堤さんが命名したのだそうです。

その向かいは、第43話の「ここから生きて出よう」、第46話の「タコ部屋の花婿」に登場した朝川知昭さんと竹林経治さん、法文書きで格闘の毎日です。

②は医系技官、③は福祉系の専門職。

④が初代弁当持ちグループです。制度がスタートしたときに問題がおきそうな中核都市が選ばれました。

⑤は介護保険料を天引き方式で成功させるための社会保険庁からの助っ人です。



## ～ きょうのおみやげは、「新たなえにし」～

### ◆ 出生の秘密 ◆

ここ、プレスセンターで、2001年5月12日、ひとつの会が開かれました。集まってくださったのは、困難な体験や環境を逆手にとって突破口を切り開いている当事者、制度や予算の壁にぶつかりながら医療・福祉現場で奮闘しているスタッフ、つくった制度や政策がほんとうに人々のしあわせにつながっているかどうか心配している行政官や首長、勉強熱心な新聞、テレビ、出版社、研究機関のみなさんでした。それなのに。。。お互いが、知りあっていないのです。

### ◆ 「えにし」の人って? ◆

福祉と医療・現場と政策のあいだに横たわる深くて広い河。。。そこに橋をかけたいという願いから「えにし」の会は始まりました。入会金なし、会費なし。資格は、この日本の医療や福祉を少しでもよくしようという志をもっておられることだけです(๖^ ̄)o

この方々をつなく、通称「えにしメール」は、国境を越え、米、英、仏、独、伊、スイス、北欧4国、タイ、韓国、そして日本の13カ国に広がりました。日本語が堪能な、韓国、スウェーデン、アメリカの方も愛読して下さっています。

HP、<http://www.yuki-enishi.com/> と「えにしメール」で、マスメディアでは、あまり重んじられない、でも大切な、みなさまの活躍をお知らせし、志の縁を結んでいます。

### ◆ 糸へんづくし ◆

胸元の名札の上下、このページの上下の縁飾りにお気づきになりましたか? 拡大すると、

…縁…絆…縁…絡…縁…紡…縁…編…縁…網…縁…繋…

「縁」という字のあいだに、様々な糸へんの字がはさまれています。グラフィックデザイナー、牧ローニさんが、この会のためにデザインして下さいました。

「人間っていろんな糸へんが絡みあい、紡ぎあって、編まれているんですよね。ネット(網)とか、繋がるとか。人と人の絆や縁に不思議なパワーを感じています」。

糸へん飾りのついた名札は、ケースからはずして記念におもちかえりくださいませ。

### ◆ 縁の下ボランティアのみなさまに、こころからの感謝を!!!!!! ◆

駄洒落大好き人間の浅野史郎さんが「文字通り『縁』の下の力持ち」と呼ぶ全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)のみなさまをはじめ、この会は、すべて、あふれ出るボランティア精神で支えられています。プロの腕と夢をもったみなさまに感謝を!!!!!!

### ◆ 「つどい」の4つのシキタリ ◆



その1: 多彩、豪華なパネリストやコーディネーターは、どんなに高名でも、講演料ナシ。「素晴らしい参加者の前で話せる、それは、「権利」なのだ」という理屈からです。

その2: 連帯がモットーですから、パソコン要約筆記、手話、磁気テープ、指点字を用意するのが慣例です。詳しくは、「えにし結び名簿」の最終ページをご覧ください。当然のことながら、介助の方からは参加費はいただきません。お子さまづれへの支援も始めました。

その3: 席は、クジ引きです。「新たなえにし」を結んでいただくためです。話の糸口になる「名札」と「えにし結び名簿」を用意しました。名簿は夜なべ仕事でつくりましたので、ミスがあるかも。発見なさったら [yuki@spanifty.com](mailto:yuki@spanifty.com) まで。

その4: 縁結び係は、裏方に徹すること、これが9年間のシキタリでした。今回は、10回を記念して、医療・福祉・障害のあいだをつなく左の本を岩波書店が、なんと

w( o )w 本日、出版して下さったものですから、禁を破ってコーディネーター役をつとめさせていただくことになりました。表紙の写真は、高齢、障害、医療が縦割りでは、いのちの尊厳は守られないこと、世界とつながること、現場と政策が近くにあることの大切さを象徴しています。